

評

アンドリス・ネルソンス指揮
ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

マーラー 不条理劇の作り込み

秋恒例のウィーン・フィルのツアー、今年の指揮者は飛ぶ鳥落とす勢いのアンドリス・ネルソンス（9日、大阪・フェスティバルホール）。しかし前半の主役はプロコフィエフのヴァイオリン協奏曲第一番を弾いた五嶋みど



森口ミツル氏撮影、大阪国際フェスティバル提供

りで、一つの楽章をまるで継ぎ目のない長い息のように聴かせる。これだけ歌心に満ちたプロコフィエフは稀。室内楽のように繊細な響きでありつつ、オーケストラ全員を意のままに操る。

対するに後半のマーラーの交響曲第5番では、指揮者とオーケストラの重量級パワーを思い知らされる。テンポは遅めで、ふだん物陰に隠れがちな細部が生々しくあらわになる。世界の割れ目から深淵しんげんがのぞく。しかも全体は鈍器の迫力であらなる。

最後の第5楽章に至っても、この重苦しさは容易に晴れない。光の背後に闇の残像が残る。大詰めの金管によるファンファーレがあらゆる矛盾をなぎ倒し、強引にハッピーエンドを打ち立てはするが、ステレオタイプな「闇から光」の円満とまるで違う世界。ネル

ソンスが描こうとしたのは、きっとこんな不条理劇としてのマーラーなのだ。この凝った作り込みにともなげに応えるウィーン・フィルの力量にも、今更だが驚嘆するほかない。

しかし驚きはまだ続く。アンコールのスッペ「軽騎兵」序曲だ。よもやこの曲の出だしが、これほどマーラーの交響曲第5番の始まりに似ているように、マーラーの5番は「軽騎兵」の絶望的パロディーだったのか。

オルガンのような響きの厚みといい、木管独奏のサーカスのような名人芸といい、一糸乱れぬ弦楽器のオペレッタ風軽妙といい、このオーケストラの能力は無比だ。ここに至ってマーラー冒頭の絶望の環はようやく閉じられ、心からのハッピーエンドに到達した。

（岡田暁生・音楽学者）